

大学生における父親・母親へのイメージに関する一研究

春日由美 山口大学教育学部 / 佐竹圭介 山口大学教育学部

Study on the Image of Fathers and Mothers among University Students

KASUGA, Yumi

Faculty of Education, Yamaguchi University

SATAKE, Keisuke

Faculty of Education, Yamaguchi University

(Received January 31, 2025)

要約

本研究の目的は、青年期後期にあたる大学生の父親へのイメージと母親へのイメージを探索的に検討することである。対象は大学生であり、父親へのイメージは61名（平均18.42±.78歳）、母親へのイメージは67名（平均18.42±.76歳）である。印刷した質問紙とGoogle Formsを用い、文章完成法により調査を行った。その結果、青年期後期の子どもは、父親や母親を肯定的・否定的・両価的に捉えるなど個人により一様でないこと、父親・母親ともに子どもは尊敬したり、親からの暖かな関わりを感じたり、親と自分は仲が良いと思ったり、似ていると思ったりすることも少なくないと考えられた。一方で、父親と母親では異なる距離間を感じたり、父親と母親では印象に残ることが異なること、また父親に対しては客観的な見方をし、母親に対しては自分と結び付けて捉えている可能性が示唆された。

キーワード：大学生，父親イメージ，母親イメージ

1 問題と目的

青年期は親からの自立が重要な発達課題と見なされ、親子関係は青年の人格形成や心理的適応などさまざまな面に大きな影響を及ぼすと考えられている（平石，2010）。青年期を境に親子関係は大きく変化し、青年期以前は、子どもは扶養され親は保護者として子どもを養育する義務と責任があるが、青年期以降、立場は次第に逆転し、親離れが進むと考えられている（大野，2010）。

これまで青年期の親子関係に関しては、青年の反抗や自立というテーマだけでなく、親密さや愛着の重要性、親子の相互調節的な発達の変化など新たな観点からのモデルが数多く提唱さ

れてきている（平石，2010）。白井（1997）は大学生と公立専修学校の学生を対象に行った調査から、親子関係において自立や分離は、愛着や支持とともに達成され、両者は対立概念ではないことを明らかにしている。また小高（1998）は、青年期の親子関係について、親から友人へとその指向性が変化するが、実際には青年期における親との関係が希薄になるのではなく、親と子の関係はその基底において継続すると述べている。また水本（2018）は、大学生を対象に調査を行い、父親との関係では心理的に分離することが、子どもの適応や発達を高めていたことを報告している。そして赤木（2018）は、女子大学生対象の調査から、娘

のアイデンティティ形成や精神的健康に重要なのは、母との分離か結合かということではなく、母親からの押し付けや母親への劣等感を感じない母娘関係であることを明らかにしている。このように、青年期後期における子どもの自立やアイデンティティ形成等と親子関係の関連が検討されてきた。平石（2011）は、青年期前期から後期にかけて青年—両親関係は相互調整的に変化し、複数の研究において、青年期前期は親子関係においては分離の側面の重要性が強調されているが、青年期後期は再び親密な結びつきが取り戻されることが指摘されていると述べている。落合・佐藤（1996）は、親子関係の変化からみた心理的離乳の過程を検討し、大学生や大学院生では、自分と親との関係は、「子が親から信頼・承認されている関係」「親が子を頼りにする関係」であると思っていることを明らかにしているが、青年期後期は、子どもも親を客観的に見る目が育ち、親もそれまでの子どもとの関係から、子どもを信頼承認し、頼りにする親子関係などへ変化する転換期と言えるかもしれない。

その他に、青年期後期の親子関係については、子どもの適応等との関連が検討されている。大島（2013）は、大学生を含む若者（平均年齢22.3歳、範囲は17～28歳）を対象に調査を行い、息子・娘共に両親から支持的な関わりを受けていると認識しているほど、抑うつは低く、幸福感は高くなることを報告している。また須藤（2021）は、女子大学生を対象に16歳までの母親の養育態度について回想させて検討し、母親の養育態度の「養護」の傾向が強いほど、また「母親との連帯・共有の強さ」「母親との同一化」の傾向が強いほど、自尊感情が高いことを報告している。そして任・林（2020）は大学生を対象に調査を行い、母親が温かい養育態度であるほど男女共に母親の気持ちへの配慮や母親からの期待に応えようという気持ちが強くなること、女子では母親の情愛

的な養育態度は内的適応を良好な方向に調整すること、父親の過保護な養育態度は男子の内的適応の低下を促すことなどの可能性を報告している。このように、青年期後期の子どもの適応等に関しても、親子関係が関連することが指摘されている。

ところで青年期後期における親子関係を考える際は、実際の共行動などよりも、子どもが親や親との関係をどのようにイメージしているかが重要と考えられる。今野（2012）は、青年期になると具体的・直接的な親子の交流は幼児時期より減少するが、それは関係の希薄さを意味するのではなく、子どもの内的世界に形成された親との関係に重要性が移行することを意味すると述べているが、青年期における親イメージを検討した研究もいくつか見られる。友久（1993）は短大生と大学生を対象に、母をイメージする形容詞、副詞、名詞、動詞や、動物等を回答させる調査を行い、やさしさや暖かさなどの肯定的イメージと同時に、うるささ、厳しさなどの否定的イメージも見られることを報告している。また春日（2005）は、女子大学生を対象に調査を行い、娘の心の中の父親像や父娘関係を捉える尺度を作成している。そして板倉・長谷川（2012）は、大学生・大学院生を対象に調査を行い、父母の結びつき低群は、高群よりも父親のイメージや母親のイメージを否定的に捉えていることを明らかにしている。また今野（2012）は中学生、高校生、大学生を対象に父親像尺度の因子分析を行い、「安心感」「回避」「権威」「身勝手」で構成されることを確認し、大学生では父親の「安心感」が高まり、「身勝手」「回避」が中学生よりも強く認識されることを明らかにしている。加えて今野（2013）は、大学生を対象に父親をどのような存在として認識しているかを捉える父親存在認識尺度を作成し、「相談できる存在」「想ってくれる存在」「母親との仲介的存在」の3因子構造が確認されたことを報告して

いる。このように青年期の親イメージについては、それぞれの側面から検討されているが、研究の蓄積がなされているとは言い難い。

Jung (Storr,1983/1997) は、「私の父」「私の母」という観念は、実際の人物から受ける非常に不完全な像と、主観的な加工の両者から成り立つとしている。特に、日常では関わることが少なくなる青年期後期の子どもの親子関係を考える際は、実際の行動について検討するのではなく、子どもがそれまでの親子関係を基に、親や自分と親の関係をどのようにイメージしているかという側面から検討することが重要と考えられる。しかし、青年期後期の親子関係については、モデルが数多く提唱され、関連要因の検討がなされてきた一方で、その前提となる青年期後期の子どもが父親・母親について、どのようにイメージしているか、あるいは自分と親との関係をどのようにイメージしているかについては十分に検討されているとは言い難い。そこで本研究では、青年期後期の大学生を対象に、父親・母親や、自分と親との関係について、どのようなイメージを抱いているかについて探索的に検討する。

II 方法

1. 対象者

大学生に調査への協力を依頼した。父親へのイメージについての調査協力者は61名（平均年齢 $18.42 \pm .78$ 歳，男性11名，女性50名），母親へのイメージについての調査協力者は67名（ $18.42 \pm .76$ 歳，男性12名，女性55名）であった。なお，すべての項目に回答しなくてもよいとしたため，各分析において，回答人数は異なっている。

2. 手続き

父親へのイメージおよび母親へのイメージの調査について，同時に授業内で協力を依頼した。調査期間は2024年5月～6月であり，回答方法は質問紙への記入またはGoogle Forms

への入力とした。質問紙調査では依頼内容と倫理的配慮について記載した表紙と，父親へのイメージと母親へのイメージの質問紙を，一纏めとして配布した。Google Formsの調査では依頼文書に依頼内容と倫理的配慮について記載し，父親へのイメージと母親へのイメージそれぞれのURLを示した。

質問紙や依頼文書には，アンケートへの協力は自由であり，成績に関わることは一切ないこと，プライバシーは保護されること等を記載した。また，父親像と母親像は別の質問とし，父親へのイメージと母親へのイメージの両方を答える必要はなく，いずれか一つでもよいことを記載した。また，全ての項目に回答しなくても提出できるようにした。

3. 調査内容

1) 属性：年齢，性別

2) 父親へのイメージに関する文章完成法：父親へのイメージや，父親と自分の関係へのイメージについて検討するため，「私の父は」「私は父を」「父は私を」「父と私は」に続けて自由に文章を記入してもらった。

3) 母親へのイメージに関する文章完成法：母親へのイメージや，母親と自分の関係へのイメージについて検討するため，「私の母は」「私は母を」「母は私を」「母と私は」に続けて自由に文章を記入してもらった。

III 結果

1. 父親へのイメージ

「私の父は」「私は父を」「父は私を」「父と私は」のそれぞれの自由記述内容の内容について分類するため，KJ法（川喜田，2017）を援用し，第1著者がカテゴリー化を行った後，第1筆者と第2筆者で妥当性を検討した後，修正を行った。まず1つの意味のある文章のまとまりを単位として区切り，内容の類似から小カテゴリー（以下，〈 〉）にグループ編成した。それらをさらに大カテゴリー（以下，

【 】)に分類した(表1~表4)。

「私の父は」は表1のように、【性格】(〈両価的〉〈優しさ・配慮〉〈アクティブ〉〈自己中心〉〈ネガティブ〉〈責任感・頼り〉〈静かさ〉〈気分屋〉〈真面目〉〈おもしろさ〉〈変わり者〉),【特徴】(〈働き〉〈身体行動〉〈趣味〉〈昔の人〉),【職業】(〈職業〉),【子どもの評価】(〈子どもの高評価〉〈能力〉),【無関心】(〈無関心〉)に分類された。「私は父を」は表2のように、【父への感情】(〈尊敬〉〈否定的感情〉〈肯定的感情〉〈頼り〉〈無関心〉〈心配〉〈申し訳なさ〉),【イメージ】(〈イメージ〉)に分類された。「父は私を」は表3のように、【接し方】(〈サポート・見守り〉〈愛情〉〈大切〉〈個人の尊重〉〈応援〉〈心配〉〈叱り〉〈優しさ〉〈両価的〉),【子どもへの意識】(〈父からのイメージ〉〈無関心〉〈分からなさ〉)に分類された。「父と私は」は表4のように、【関わり】(〈仲の良さ〉〈希薄〉〈仲の悪さ〉〈距離〉),【状態】(〈類似〉〈親子〉〈関係〉〈違い〉)に分類された。

2. 母親へのイメージ

「私の母は」「私は母を」「母は私を」「母と私は」のそれぞれの自由記述内容の内容について分類するため、父親像同様にKJ法(川喜田, 2017)を援用し、第1著者がカテゴリー化を行った後、第1筆者と第2筆者で妥当性を検討した後、修正を行った(表5~表8)。

「私の母は」は表5のように、【性格】(〈優しさ〉〈開放的〉〈頑張り〉〈偉大さ〉〈堅実〉〈過保護・心配性〉〈両価的〉〈ネガティブ〉〈子どもとの違い〉〈厳しさ〉),【特徴】(〈料理上手〉〈身体〉〈生活〉〈器用さ〉),【関係】(〈寄り添い〉〈理解できなさ〉〈友達親子〉),【職業】(〈職業〉)に分類された。「私は母を」は表6のように、【母への感情】(〈尊敬〉〈信頼〉〈肯定的感情〉

情〉〈両価的〉〈否定的感情〉〈心配〉〈不信〉),【自分にとっての存在】(〈配慮〉〈支え〉),【イメージ】(〈イメージ〉)に分類された。「母は私を」は表7のように、【接し方】(〈大切〉〈愛情〉〈見守り〉〈心配〉〈応援〉〈褒め〉〈過保護〉〈使役〉〈呼び方〉),【子どもへの意識】(〈信頼〉〈分からなさ〉〈尊敬〉〈理解〉)に分類された。「母と私は」は表8のように、【関わり】(〈仲の良さ〉〈共行動〉〈仲の悪さ〉〈友人親子〉〈関係の分からなさ〉),【状態】(〈類似〉〈親子〉〈違い〉)に分類された。

IV 考察

各項目について、父親と母親の分類された結果を合わせながら、以下に考察を行う。

1. 「私の父は」「私の母は」の分類

「私の父は」と「私の母は」を分類した結果、最も記述数が多かった大カテゴリーは【性格】であった。【性格】の小カテゴリーの父親・母親に共通するものとして、両価的側面や優しさに関するものがあり、特に母親での〈優しさ〉の記述数は【性格】の中で最も多かった。これらから、子どもは父親・母親共に、「~だが、~でもある」のように、両価的に捉えている場合があることがうかがえる。また、父親以上に母親は、優しいものとして捉えられている可能性が考えられる。そして父親の〈責任感・頼り〉や母親の〈頑張り〉〈偉大さ〉〈堅実〉のように、親を頼りがいがあったり、頑張っている一人の大人として捉えていることもうかがえた。さらに、父親の〈アクティブ〉や母親の〈開放的〉のように、親の積極的・開放的な態度が印象に残っている場合もあると考えられる。

そして父親にあり母親にない【性格】の小カテゴリーとして、〈自己中心〉があった。女子大学生のみを対象とした調査であるが、春日(2005)は、「娘の心のなかの父親像尺度」

表1 「私の父は」の 카테고리化と記述例 (回答数=57)

大カテゴリー	小カテゴリー	記述例
【性格】 (34)	〈両価的〉 (5)	時に厳しく時に優しい／優しくて面倒見が良くてでもたまにめんどくさい時がある人だ (原文ママ)
	〈優しさ・配慮〉 (5)	優しい／気遣いができて人のために動く人
	〈アクティブ〉 (4)	アクティブな人です／情熱のある人だ／豪快な性格です
	〈自己中心〉 (4)	自分本位な人間である／全て自己完結している人／人の気持ちがわからない
	〈ネガティブ〉 (4)	普段は冷たい／褒められた性格ではない／怒りっぽい
	〈責任感・頼り〉 (3)	責任感が強い／とても頼りになります
	〈静かさ〉 (3)	静かであまり話しません／無口な人だ
	〈気分屋〉 (2)	気分屋です
	〈真面目〉 (1)	まじめ
	〈おもしろさ〉 (1)	おもしろい
【特徴】 (13)	〈変わり者〉 (1)	変わり者
	〈働き〉 (9)	仕事で忙しい／仕事熱心／働いている
	〈身体行動〉 (3)	背が高い／一般的な家庭のお父さんと比べて、家事をよくする方である
	〈趣味〉 (1)	アニメが好きだ
【職業】 (5)	〈昔の人〉 (1)	昔の人です
【子どもの評価】 (5)	〈職業〉 (5)	営業職をしている／(職業名)をしています
	〈子どもの高評価〉 (3)	尊敬する人です／素敵な父親です
【無関心】 (1)	〈能力〉 (2)	効率が良いです／有能です
	〈無関心〉 (1)	私に興味がない

注) その他として、父親の死についての記載があった。

注) () の数字は記述数を表す (以下、表2～表8も同様)。

表2 「私は父を」の 카테고리化と記述例 (回答数=51)

大カテゴリー	小カテゴリー	記述例
【父への感情】 (43)	〈尊敬〉 (24)	尊敬している／父親としては尊敬／職業の面で尊敬しています
	〈否定的感情〉 (8)	嫌っている／苦手な人に感じる／あまり優しくできない
	〈肯定的感情〉 (4)	大切に思っています／慕っている
	〈頼り〉 (4)	頼もしく思うときがある／とても頼りに思っている
	〈無関心〉 (1)	何とも思っていない
	〈心配〉 (1)	心配している
【イメージ】 (6)	〈申し訳なさ〉 (1)	申し訳なく思う
	〈イメージ〉 (6)	いい人だと思っている／面白い人だと思う／よく分からない人だなど思っています

注) その他として、「忘れない」という記載があった。

表3 「父は私を」の 카테고리化と記述例 (回答数=42)

大カテゴリー	小カテゴリー	記述例
【接し方】 (32)	〈サポート・見守り〉 (9)	気遣っている／気にかけて、サポートしてくれる／きっとなんとかかなと見守ってくれている
	〈愛情〉 (7)	愛している／好きでいてくれると思っている
	〈大切〉 (6)	大切にしてくれます
	〈個人の尊重〉 (4)	大人として接してくれます／信頼している／のびのびと育ててくれ、やりたいと言ったことは大抵やらせてくれた
	〈応援〉 (2)	応援してくれている
	〈心配〉 (1)	心配してくれる
	〈叱り〉 (1)	本気で叱ってくれたことがあります
	〈優しさ〉 (1)	優しい
【子どもへの意識】 (9)	〈両価的〉 (1)	少し甘やかしている部分があるが、デリカシーがない部分もある
	〈父からのイメージ〉 (4)	子供だと思っている／がんばり屋だと思っている
	〈無関心〉 (3)	何とも思っていないと思う
	〈分からなさ〉 (2)	あんまりわかってない／どう思っているのかよく分からない

注) その他として、「私は父を」に関すると考えられる記載があった。

表4 「父と私は」のカテゴリー化と記述例（回答数=48）

大カテゴリー	小カテゴリー	記述例
【関わり】 (31)	〈仲の良さ〉 (21)	仲良しだ／気が合う／話はあまりしないけど、いい関係であると思います
	〈希薄〉 (4)	互いに無関心／あまり一緒にいる機会がない／よくわからない
	〈仲の悪さ〉 (3)	仲が悪い／素直になれない
	〈距離〉 (3)	適度な距離感を保っている／距離はあるが互いを思っている
【状態】 (17)	〈類似〉 (11)	性格や好みがよく似ている／顔が似ている／趣味が似ている／短気な所がある／人見知りだ
	〈親子〉 (3)	親子です
	〈関係〉 (3)	良くも悪くも普通である／母と同様、友達のように接し合っている／血縁関係ではない
	〈違い〉 (1)	違います

表5 「私の母は」のカテゴリー化と記述例（回答数=64）

大カテゴリー	小カテゴリー	記述例
【性格】 (44)	〈優しさ〉 (13)	優しい／ふとした時に母としての優しさを見せる
	〈開放的〉 (10)	いつも明るい／おしゃべりです／おてんばです／ユーモアがある／大ざっぱである
	〈頑張り〉 (5)	いつもがんばっている／働き者です／料理上手で仕事もがんばるすごい人
	〈偉大さ〉 (5)	偉大な存在だと思う／言っていることはだいたい合っている／1人で〇人の子供を育てあげました
	〈堅実〉 (3)	真面目な人である／しっかりしている
	〈過保護・心配性〉 (3)	過保護／心配性です
	〈両価的〉 (2)	時に優しく時に厳しいです／冷たいけど真面目で優しい人だ
	〈ネガティブ〉 (1)	性格が悪い
	〈子どもとの違い〉 (1)	私と性格が真逆である
	〈厳しさ〉 (1)	厳しいです
【特徴】 (10)	〈料理上手〉 (3)	料理がとても上手だ
	〈身体〉 (3)	背が低い／よく足をつる
	〈生活〉 (2)	私生活が充実している人／忙しい
	〈器用さ〉 (2)	器用でなんでもうまくこなせる人
	【関係】 (8)	〈寄り添い〉 (6)
〈理解できなさ〉 (1)		私と価値観が全く違うため、理解できないこともたくさんある
〈友達親子〉 (1)		友達みたいな人です
【職業】 (4)	〈職業〉 (4)	(職業名) をしている

表6 「私は母を」のカテゴリー化と記述例（回答数=53）

大カテゴリー	小カテゴリー	記述例
【母への感情】 (42)	〈尊敬〉 (27)	尊敬している／人として、母として尊敬しています／尊敬していて、将来こんな大人になりたいなと思っています
	〈信頼〉 (5)	信頼している
	〈肯定的感情〉 (4)	かなり好き／誇りに思っている／私と仲良しです
	〈両価的〉 (2)	好きな部分もあるが、苦手な部分の方が大きい／ありがたい存在だけどガミガミ言われると腹が立つ
	〈否定的感情〉 (2)	あまり好きじゃない／怖い
	〈心配〉 (1)	頑張りすぎていつか倒れないかと心配している
【自分にとっての存在】 (9)	〈不信〉 (1)	信頼し切れてないかもしれません
	〈配慮〉 (6)	大切にしたい／手助けしたい
	〈支え〉 (3)	欠かせない存在です／ありがたいと思う
【イメージ】 (2)	〈イメージ〉 (2)	すてきな母親と思っています／意外と完璧じゃないなとわかってきた

注) その他として、「私の母は」に関すると考えられる記載があった。

表7 「母は私を」のカテゴリー化と記述例（回答数=51）

大カテゴリー	小カテゴリー	記述例
【接し方】 (40)	〈大切〉 (13)	大切に思っています／大事にしています
	〈愛情〉 (7)	愛している／可愛がってくれる
	〈見守り〉 (7)	守っている／気にかけてくれる／いつも助けてくれる
	〈心配〉 (4)	心配している
	〈応援〉 (3)	いつも応援してくれる／いつも励ましてくれます
	〈褒め〉 (2)	よくほめてくれる
	〈過保護〉 (2)	過保護にしすぎだ／大切にしてくれているが、少し過保護な部分もある
	〈使役〉 (1)	よく使います
	〈呼び方〉 (1)	下の名前で呼ぶ
	〈信頼〉 (5)	信頼している／頼りにしていると思います／一人でも大丈夫だと思ってくれている
【子どもへの意識】 (12)	〈分からなさ〉 (3)	どう思っているのかよくわからない／あんまりわかっていない気もする
	〈尊敬〉 (2)	尊敬している
	〈理解〉 (2)	理解している

注) その他として、「私は母を」に関すると考えられる記載があった。

表8 「母と私は」のカテゴリー化と記述例（回答数=57）

大カテゴリー	大カテゴリー	大カテゴリー
【関わり】 (40)	〈仲の良さ〉 (31)	仲良しだ／友達という感じではないが、仲良しだ／互いに応援し合う同士である
	〈共行動〉 (3)	よ割とよく話す／く一緒に買い物に行く／ときどきけんかします
	〈仲の悪さ〉 (2)	仲が悪い／気が合わない
	〈友人親子〉 (2)	友達みたいな関係だと思います
	〈関係の分からなさ〉 (2)	仲がいいのか悪いのかあまりわからない
	〈類似〉 (9)	似ている／考え方が似ている／性格が似ていると思う
【状態】 (16)	〈親子〉 (4)	親子／家族である
	〈違い〉 (3)	似ていない／性格が真反対

注) その他として、母親の年齢に関すると考えられる記載があった。

の下位尺度として、父親の「自己中心的・頑固な父」を見出しており（項目内容は「父はわがままだ」「父は自己中心的だ」など）、本研究も同様の結果を示していると考えられる。一方、母親にあり父親にないカテゴリーとして〈過保護・心配性〉があった。小野ら（2022）では、大学生において、母親の過保護な養育態度は、子どもの内的作業モデルにおける不安と正の相関があったことが報告されているが、大学生でも母親からの過干渉や心配を感じる場合があると考えられる。その他、父親では複数の様々な側面の性格が分類され、子どもが見ている父親は多様さを持つことも推察される。

そして父親・母親共に、【特徴】の大カテ

グリーが分類されたが、父親・母親に共通する小カテゴリーは身体面の特徴のみであり、父親は仕事や趣味などについて、母親は料理等の日常生活についての小カテゴリーが見られた。春日（2007）では、19歳～27歳の女性30名を対象に父子画・母子画と面接調査を行い、父子関係と母子関係の差異について検討し、父親は子どもに社会について伝え、母親は日常を伝えることを報告している。今回は子どもは男女を対象にしているが、春日（2007）と同様の結果であると考えられる。

また、父親・母親共に、【職業】の大カテゴリーが分類され、記述内容は親の職業名や職種であった。このように、社会に出る前の大学生の子どもにとって、親の職業や働いている姿

は、父親母親に関わらず意識しやすいことが考えられる。

そして父親のみに【子どもの評価】【無関心】の大カテゴリーが、母親のみに【関係】の大カテゴリーが分類された。子どもは父親がどのような人物かということや、父親が自分をどう思っているかを客観的に捉える一方で、母親は自分にとってどのような存在かというように、自分と結び付けて考える可能性が考えられる。

2. 「私は父を」「私は母を」の分類

「私は父を」と「私は母を」を分類した結果、最も記述数が多かった大カテゴリーは父親では【父への感情】、母親では【母への感情】といった親への子どもが持つ感情であり、いずれも〈尊敬〉の記述数が最も多かった。このことから、大学生にとって、父親や母親が尊敬の対象となることも少なくないことがうかがえる。【父への感情】【母への感情】のその他の小カテゴリーでは、父親・母親共に〈否定的感情〉〈肯定的感情〉があり、父親では〈無関心〉、母親では〈両価的〉〈不信〉も見られ、父親や母親にポジティブな感情を持つこともあれば、ネガティブな感情を持ったり、両価的感情を持つことも少なくないことが推測された。また、父親では〈頼り〉が、母親では〈信頼〉が見られ、父親・母親共に1記述ずつであるが〈心配〉もあり、大学生において親が頼れる対象と実感されている場合もあれば、親を心配することもあると考えられる。また、父親・母親共に【イメージ】も分類され、日頃から父親や母親を「こういう人だ」と捉えている場合もあると考えられた。そして母親のみに【自分にとっての存在】（小カテゴリーは〈配慮〉〈支え〉）が見られた。田口・成田（2018）は、女子大学生に調査を行い、母娘間の信頼関係が高く、母を支えたいと強く思っている娘は、アイデンティティ確立と自尊感情の両方において高い可能性を指摘しているが、大学生は父親よ

りも母親に対して、助けたいと思ったり、支えられている感覚を持つことが考えられる。

小高（1998）は、大学生対象の調査から、親子関係を、①密着した親子関係（親と情愛的な絆を感じ、親を尊敬し、親に服従した親子関係）、②矛盾・葛藤的な親子関係（親に対して距離を置いて冷静に接することができないが、その一方で情愛的な絆は弱いといった矛盾・葛藤的な親子関係）、③離反的な親子関係（親に反発を感じ、親と距離を置いた親子関係）、④対等な親子関係（親を1人の人間として認め、親に対して尊敬の念を持っており、親に対して感謝しているという、レベルの高い親と子の関係）、の4つの型に分けている。今回の結果からも、それぞれの型に関連するカテゴリーが分類されたと考えられる。

3. 「父は私を」「母は私を」の分類

「父は私を」と「母は私を」を分類した結果、最も記述数が多かった大カテゴリーは、父親・母親共に【接し方】であった。【接し方】では父親・母親両方の〈愛情〉〈大切〉〈応援〉〈心配〉が、父親では〈サポート・見守り〉〈優しさ〉が、母親では〈見守り〉〈褒め〉が見られ、大学生はこのような父親や母親からの暖かな関わりを感じる事が少なくないと考えられる。一方で父親では〈個人の尊重〉、母親では〈過保護〉が見られ、父親からは一個人として尊重されている感覚を持つことがあったり、母親からは過保護に関わっている感覚を持ったりすることが考えられ、父親と母親では異なる心理的距離を感じている可能性も考えられる。

また、父親・母親共に【子どもへの意識】も分類された。小カテゴリーでは父親・母親共に〈分からなさ〉が、また父親では〈無関心〉が見られ、子どもは親から「分かってもらっていない」と感じる場合や、父親が自分に「無関心」であると感じている場合があると考えられる。一方で、父親では〈父からのイメージ〉が

あり、「父親は自分のことをこのように思っているのではないか」と感じている場合もあると考えられた。また、母親では〈信頼〉〈尊敬〉〈理解〉も見られ、母親から自分は評価されたり、理解されていると感じる場合もあると考えられた。これらから、大学生は父親や母親から、分かってもらっていない（または関心を持たれていない）と感じる場合と、親は自分に対してこう考えているのではないかと感じられる場合の両方があると考えられる。そして、特に母親からは、ポジティブに捉えられていると実感している場合があることが考えられる。

4. 「父と私は」「母と私は」の分類

「父は私を」と「母は私を」を分類した結果、最も記述数が多かった大カテゴリーは、父親・母親共に【関わり】であり、父親・母親共に〈仲の良さ〉〈仲の悪さ〉が見られたが、父親・母親共に〈仲の良さ〉の記述数が〈仲の悪さ〉より多かった。これらから、大学生は父親とも母親とも、「仲が良い」と感じる事が少ないことがうかがえた。一方で、父親では〈希薄〉〈距離〉が、母親では〈共行動〉〈友達親子〉が見られた。このように、大学生は、父親より母親の方が関係が近く、共行動も多いことが考えられる。なお、娘に限った研究ではあるが、春日（2000）では、父親から娘への愛情は、母親よりも距離を保ったものであることが指摘されており、また今回の父親の〈距離〉の記述内容も、「適度な距離感を保っている」「距離はあるが互いを思っている」などであり、父親から子どもへの距離は必ずしもネガティブとは言えないと考えられる。また、母親のみに〈関係の分らなさ〉が見られ、自分と母親との関係が「分からない」と感じる場合もあると考えられる。

そして、父親・母親共に【状態】も分類され、父親・母親共に〈類似〉〈親子〉〈違い〉が見られ、そのうち〈類似〉の記述数が父親・母親共に多かった。このことから、大学生は父

親とも母親とも「自分と似ている」と感じることも少なくないと考えられる。また、父親のみで〈関係〉が見られ、自分と父親との関係を、「このような関係」と客観的に捉えている場合もあると考えられる。

V まとめと課題

今回の検討の結果、青年期の子どもは父親や母親に対し、肯定的に捉える場合もあれば、否定的に捉えたり、両面的に捉えるなど、一様でないことが考えられた。また父親・母親ともに、一人の大人として頑張っている様子や、積極的・開放的な態度が、青年期の子どもの印象に残ることが考えられた。そして、青年期の子どもにとって、父親・母親共に尊敬の対象となったり、子どもが親からの暖かな関わりを感じたり、親と仲が良いと感じたりすることも少なくないと考えられた。また父親・母親共に自分と似ていると感じることも少なくないと考えられた。

そして、父親と母親では距離の違いを感じている可能性や、父親より母親を優しいと感じ、父親については多様な側面を見ていることが考えられた。そして父親では仕事や趣味が、母親では料理や生活面が印象に残ることが考えられた。また父親はどのような人物かということや、父親が自分をどう見ているかといった客観的な見方をしている可能性が、母親に対しては自分にとってどんな存在かや、助けたいと感じたり、支えられていると感じるような、自分と結びつけて考えている可能性が考えられた。

このように、青年期の子どもは、父親・母親に対して共通したイメージも持つが、父親と母親で異なるイメージも持っていることが考えられる。今後、青年期の親子関係を考える際に、父母で質的に共通することと異なることがあることを視野に入れて、検討することが必要と考えられる。

本研究の対象者は男性11名、女性50名であ

り、人数の偏りがあり、子どもの男女差による比較をしていない点が、今後の課題として残された。また、対象者数をさらに増やして検討することも必要である。

文献

赤木真弓 (2018) 母娘関係が娘のアイデンティティ形成と精神的健康に与える影響：母娘何系尺度の作成を通して，発達心理学研究，29（3），114-124.

平石賢二 (2010) 青年期の親子関係．大野久編著 エピソードでつかむ青年心理学 ミネルヴァ書房 pp113-145.

平石賢二 (2011) 親子関係の絆・家族の絆．平石賢二編著 改訂版思春期・青年期のこころ 北樹出版 pp54-74.

今野歩 (2012) 青年が認識する父親像の特徴とその発達的变化，生涯発達心理学研究，4，65-74.

今野歩 (2013) 青年における父親に対する存在認識の検討：母親との比較から，生涯発達心理学研究，5，63-72.

板倉憲政・長谷川啓三 (2012) 青年期の親子関係と父母関係の関連性に関する基礎研究，対人社会心理学研究，12，85-91.

春日由美 (2000) 日本における父娘関係研究の展望：娘にとっての父親，九州大学心理学研究，1，157-171.

春日由美 (2005) 女性にとっての父娘関係に関する一研究，心理臨床学研究，23（5），597-603.

春日由美 (2007) 女性にとっての父娘関係に関する心理学的研究，博士学位論文（九州大学）.

川喜田二郎 (2017) 発想法改版 中公新書

小高恵 (1998) 青年期後期における青年の親への態度・行動についての因子分析的研究，教育心理学研究，46，333-342.

水本深喜 (2018) 青年期後期の子の親との関

係—精神的自立と親密性からみた父息子・父娘・母息子・母娘間差—，教育心理学研究，66，111-126.

任玉洁・林雅子 (2020) 親の養育態度が大学生の過剰適応に及ぼす影響—性差の視点から，パーソナリティ研究，29（1），23-26.

落合良行・佐藤有耕 (1996) 親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析，教育心理学研究，44，11-22.

小野夏月・福岡欣治・中村有里 (2022) 親のソーシャルスキルと養育態度が大学生の内的作業モデルを介してソーシャルスキルに与える影響，川崎医療福祉学会誌，31（2），381-393.

大野久 (2010) 青年期を理解する．大野久編著 エピソードでつかむ青年心理学 ミネルヴァ書房 pp1-33.

大島聖美 (2013) 夫婦間の信頼感と両親からの支持的関わりが若者の心理的健康に与える影響の男女差，発達心理学研究，24（1），55-65.

須藤春佳 (2021) 「親子関係の友だち化」の検討—青年期女子の母娘関係と自尊感情を通して—，神戸女学院大学論集，68（1），77-90.

白井利明 (1997) 青年心理学の観点からみた「第二反抗期」，心理科学，19（1），9-24.

Storr A (1983) *The essential Jung*. Princeton University Press. 山中康祐（監修）菅野信夫・皆藤章・濱野清志・川崎克哲（訳）(1997) エッセンシャル・ユング 創元社

田口幸歩・成田好美 (2018) 女子大生の母娘関係が娘のアイデンティティ確立と自尊感情に与える影響，秋田県母性衛生学会雑誌，32，28-33.

友久茂子 (1993) 青年期における「母」イ

メージー大学生を対象とした調査資料を基
に，甲南大学学生相談室紀要，1，36-46.